

# Wishart 行列の関数の漸近分布

塩谷 実, 早川 毅

(1964年11月受付)

## Asymptotic Distributions of Functions of Wishart Matrix

MINORU SIOTANI and TAKESI HAYAKAWA

Recently some asymptotic distributions of functions of a correlation matrix have been obtained by Olkin and Siotani [3]. There, the asymptotic joint distribution of simple correlation coefficients was, first of all, obtained and others were derived on the basis of this distribution by using the usual delta method. A little later, some of them were found to be able to be derived in very simple way by regarding the statistics as functions of a Wishart matrix.

Along the same line with the above, we give, in this paper, two asymptotic joint distributions:

(I) the asymptotic joint distribution of  $r^2_{1(i_2, \dots, i)}$ ,  $i=2, \dots, p$ , the squares of multiple correlation coefficients between  $x_1$  and  $(x_2, \dots, x_i)$ ,  $i=2, \dots, p$ , (Section 4);

(II) the asymptotic joint distribution of  $r^2_{1(i_2, \dots, i-1)}$ ,  $i=2, \dots, p$ , the squares of partial correlation coefficients between  $x_1$  and  $x_i$  for fixed  $x_2, \dots, x_{i-1}$ ,  $i=2, \dots, p$ , (Section 5),

where we assume that  $(x_1, \dots, x_p)$  be subject to a  $p$ -variate non-singular normal distribution.

We want to summarize, in Section 2, some of results obtained in [3] and given in Olkin's lecture on multivariate analysis offered at Stanford University, 1963-1964. In the section 3, we shall give some simple but very useful formulas for asymptotic variances and covariances of functions of a Wishart matrix.

The Institute of Statistical Mathematics

### 1. はじめに

Olkin と Siotani [3] は, 相関係数に関する研究において, 相関行列の関数の漸近分布を, いくつかの関数に対して与えている. ここでは, 最初に, 相関行列の要素, すなわち, 単相関係数の漸近的同時分布が求められた.

そして, この漸近分布を出発点にして, 他の相関行列の関数の漸近分布を導いた. しかし, 相関係数の研究という枠にとらわれて, かなり冗長な計算がみられるのである. そのあるものは, 同時に, Wishart 行列の関数と見られ, この観点からすれば, 第3節に示した公式に基いて簡単に導かれるのである. このことは, Olkin, Siotani により相関係数の研究が一段落つい

て間もなく認められ、1963年秋から1964年春にかけて、Olkinにより行なわれた、Stanford Universityの統計学科の、多変数解析に関する講義にも取り入れられた。そこでは、多変数解析の仮設検定に現われる、Wishart行列の関数として現われる統計量がいくつか取り扱われた。第2節に、以上述べたいくつかの結果をまとめておきたいと思う。

本論文は、上に述べたのと同じ線に沿って、すなわち、第3節の公式を次々に使いながら、(I)  $x_1$  と  $(x_2, \dots, x_i)$ , ( $i=2, \dots, p$ )、の間の重相関係数の自乗、 $r^2_{1(2, \dots, i)}$ ,  $i=2, \dots, p$ 、の漸近分布、(II)  $x_2, \dots, x_{i-1}$ の影響を除いた  $x_1$  と  $x_i$  の偏相関係数の自乗、 $r^2_{1i(2, \dots, i-1)}$ ,  $i=2, \dots, p$  の漸近分布を導くものである。ここに、 $(x_1, \dots, x_p)$  は  $p$ -変数正規分布に従うものと仮定されている。

この論文で取り扱われる分布は、全部、いわゆる、non-null case のもの、すなわち、母集団において、統計量に対応する量が零でない場合のものである。一般に、多変数解析の検定問題において、仮設の下における統計量の分布はわかっても、その検定力となると、なかなか評価がむつかしい。non-null case の分布を求めることが容易でないのがその理由である。この問題への研究の一環として、第1近似としての漸近分布を求めるという意図を、この論文が持っていることを申し添えておく。

2. 既に求められている結果

前節で述べたように、Olkin と Siotani によって既に求められている結果で、本論文と同系統と思われるものをいくつか、ここにまとめておこう。次の記号を使う。

母集団は  $p$  変数正規分布であり、その共分散行列、相関行列をそれぞれ  $\Sigma \equiv (\sigma_{ij})$ ,  $P \equiv (\rho_{ij})$  で表わす。勿論  $p \times p$ , 対称, 正值定符号である。

$S \equiv (s_{ij})$ ;  $R \equiv (r_{ij})$ : それぞれ標本の共分散行列, 相関行列で, その自由度は  $n$  である。

$$\Sigma = \begin{bmatrix} \Sigma_{11} & \cdots & \Sigma_{1q} \\ \vdots & & \vdots \\ \Sigma_{q1} & \cdots & \Sigma_{qq} \end{bmatrix} \begin{matrix} p_1 \\ \vdots \\ p_q \end{matrix}; \quad S = \begin{bmatrix} S_{11} & \cdots & S_{1q} \\ \vdots & & \vdots \\ S_{q1} & \cdots & S_{qq} \end{bmatrix} \begin{matrix} p_1 \\ \vdots \\ p_q \end{matrix}$$

$$\Sigma^{(m)} = \begin{bmatrix} \sigma_{11} & \cdots & \sigma_{1m} \\ \vdots & & \vdots \\ \sigma_{m1} & \cdots & \sigma_{mm} \end{bmatrix}; \quad S^{(m)} = \begin{bmatrix} s_{11} & \cdots & s_{1m} \\ \vdots & & \vdots \\ s_{m1} & \cdots & s_{mm} \end{bmatrix}$$

相関行列についても同様の記号を用いる。

(I)  $\sqrt{n} \{ |R| - |P| \}$  の極限分布は、平均 0, 分散  $2|P|^2(\text{tr } P^2 - p)$  をもつ正規分布である。

(II)  $\sqrt{n} \{ (|R_{(i)}|, \dots, |R_{(p)}|) - (|P_{(i)}|, \dots, |P_{(p)}|) \}$  の同時極限分布は、平均ベクトル  $(0, \dots, 0)$  なる正規分布で、その共分散は、 $i \leq j$  の時

$$\phi_{ij} = 2|P_{(i)}||P_{(j)}| \{ \text{tr } P_{(i)}^2 - i + \text{tr } P'_{ij}(I - P_{(i)}^{-1})P_{ij} \}.$$

ただし  $P_{ij}$  は  $i \times (j-i)$  行列 ( $\rho_{\alpha\beta}$ ,  $\alpha=1, \dots, i$ ;  $\beta=i+1, \dots, j$ ).  $i > j$  の時は上の式で  $i$  と  $j$  を交換したものである。特に  $i=j$  の時は、 $\phi_{ii} = 2|P_{(i)}|^2(\text{tr } P_{(i)}^2 - i)$ 。

(III)  $p$  変数を  $q$  個の組に分けた時、その独立性の尤度比検定規準は

$$v = \frac{|S|}{|S_{11}| \cdots |S_{qq}|} = \frac{|R|}{|R_{11}| \cdots |R_{qq}|}$$

である。これにたいして、 $\mu = |S| / \prod_{i=1}^q |\Sigma_{ii}|$  とおけば、 $v$  は漸近的に平均  $\mu$ , 分散

$$\frac{2}{n} \mu^2 [\text{tr} (D_{\Sigma}^{-1} \Sigma)^2 - p]$$

の正規分布に従う。ここで

$$D_{\Sigma} = \begin{bmatrix} \Sigma_{11} & & 0 \\ & \cdot & \\ 0 & & \Sigma_{qq} \end{bmatrix}.$$

(IV) Sphericity, すなわち,  $H_0: \Sigma = \sigma^2 I$  の尤度比検定規準は,  $w = |S| / \left( \frac{\text{tr } S}{p} \right)^p$  である.

$w$  の漸近分布は, 平均  $\tau = |\Sigma| / \left( \frac{\text{tr } \Sigma}{p} \right)^p$ , 分散  $\frac{2}{n} \tau^2 \left\{ \frac{p^2}{(\text{tr } \Sigma)^2} \text{tr } \Sigma^2 - p \right\}$  の正規分布である.

(V) Roy-Bargmann [4] による step-down multiple correlation は次のように定義される.

$$1 - \bar{r}_i^2 = \frac{|\mathbf{S}_{(i)}|}{s_{ii} |\mathbf{S}_{(i-1)}|}, \quad 1 - \bar{\rho}_i^2 = \frac{|\Sigma_{(i)}|}{\sigma_{ii} |\Sigma_{(i-1)}|}, \quad i=2, \dots, p$$

ここに  $\bar{r}_i$  は,  $\bar{r}_{i(1), \dots, (i-1)}$  の,  $\bar{\rho}_i$  は,  $\rho_{i(1), \dots, (i-1)}$  の略号で,  $\mathbf{x}_i$  と  $(x_1, \dots, x_{i-1})$  の間の重相関係数である. このとき,  $\sqrt{n} \{(\bar{r}_2^2, \dots, \bar{r}_p^2) - (\bar{\rho}_2^2, \dots, \bar{\rho}_p^2)\}$  の極限分布は正規で, 平均は,  $(0, \dots, 0)$ , 分散・共分散は

$$\begin{aligned} \varphi_{ii} &= 4\bar{\rho}_i^2(1 - \bar{\rho}_i^2)^2, \\ \varphi_{ij} &= \varphi_{ji} = 2(1 - \bar{\rho}_i^2)(1 - \bar{\rho}_j^2)[\rho_{ij}^2 - \bar{\rho}_{j(1), \dots, (i)}^2 + \bar{\rho}_{j(1), \dots, (i-1)}^2] \quad (i < j) \end{aligned}$$

で与えられる.

以上の結果において, 統計量に対応する母集団の量が 0 の時は, 分布が degenerate して, 正規分布とならないことを注意しておく.

### 3. 公 式

$S$  を自由度  $n$  の標本共分散行列とする. この時,  $nS$  は Wishart 行列,  $p \lim S = \Sigma$  で, 漸近分布において

$$A\text{-cov}(s_{ij}, s_{kl}) = \frac{1}{n} (\sigma_{ik}\sigma_{jl} + \sigma_{il}\sigma_{jk}) \quad (3.1)$$

が成立することはよく知られている, (例えば [1] の 75 頁). また標本モーメントの関数の漸近分布に関する Cramér の結果 [2, 366 頁] により, 普通の regularity conditions の下で,

$\sqrt{n} \{f(S) - f(\Sigma)\}$  の極限分布が平均 0 の正規分布となることも周知の通りである. 問題は その分散の評価にある. 普通, いわゆるデルタ法により行なわれるが, 今取り扱っている  $S$  の関数の場合に, 次の公式は便利である.

[公式 I]  $f(S)$  の漸近分布における分散は

$$A\text{-var} \{f(S)\} = \frac{2}{n} \text{tr} (F\Sigma)^2 \quad (3.2)$$

$$= \frac{2}{n} \{f(\Sigma)\}^2 \text{tr} (\Phi\Sigma)^2 \quad (3.3)$$

で与えられる. ただし

$$F = (f_{ij}), \quad f_{ij} = \frac{\partial f(\Sigma)}{\partial \sigma_{ij}}; \quad \Phi = (\phi_{ij}), \quad \phi_{ij} = \frac{\partial \log f(\Sigma)}{\partial \sigma_{ij}}.$$

証明: デルタ法により

$$A\text{-var} \{f(S)\} = E \left\{ \sum_{i,j=1}^p \frac{\partial f(S)}{\partial \sigma_{ij}} \Big|_{S=\Sigma} (s_{ij} - \sigma_{ij}) \right\}^2$$

$$\begin{aligned}
 &= \sum_{i,j,k,l=1}^p \frac{\partial f(\Sigma)}{\partial \sigma_{ij}} \frac{\partial f(\Sigma)}{\partial \sigma_{kl}} E(S_{ij}-\sigma_{ij})(S_{kl}-\sigma_{kl}) \\
 &= \sum_{i,j,k,l=1}^p f_{ij} f_{kl} \cdot \frac{1}{n} (\sigma_{ik}\sigma_{jl} + \sigma_{il}\sigma_{jk}) \\
 &= \frac{2}{n} \sum_{i,j,k,l=1}^p f_{ij} f_{kl} \sigma_{ik} \sigma_{jl} \\
 &= \frac{2}{n} \text{tr} (F\Sigma)^2
 \end{aligned}$$

(3.3) は

$$f_{ij} = \frac{\partial f(\Sigma)}{\partial \sigma_{ij}} = f(\Sigma) \frac{\partial \log f(\Sigma)}{\partial \sigma_{ij}} = f(\Sigma) \phi_{ij}$$

であるから明らかである。

[公式 II]  $f(S), g(S)$  を2つの  $S$  の関数とすると、同時漸近分布における共分散は

$$A\text{-cov} \{f(S), g(S)\} = \frac{2}{n} \text{tr} (F\Sigma G\Sigma) \tag{3.4}$$

$$= \frac{2}{n} f(\Sigma)g(\Sigma) \text{tr} (\Phi\Sigma\Psi\Sigma) \tag{3.5}$$

で与えられる。ただし

$$G = (g_{ij}) = \left( \frac{\partial g(\Sigma)}{\partial \sigma_{ij}} \right), \quad \Psi = (\psi_{ij}) = \left( \frac{\partial \log g(\Sigma)}{\partial \sigma_{ij}} \right).$$

証明は公式 I と同じことである。第2節の (III), (IV) に記した結果は、公式 I を使えば簡単に求められる。例えば、前節 (IV) の  $w = |S| / \left( \frac{\text{tr } S}{p} \right)^p$  の漸近分布における分散については次のようになる。

$$\log w = \log |S| - p(\text{tr } S) + p \log p$$

$$\phi_{ij} = \frac{\partial \log w}{\partial s_{ij}} \Big|_{S=\Sigma} = (\Sigma^{-1})_{ij} - \frac{p}{\text{tr } \Sigma} (I)_{ij}$$

$$\Phi = \Sigma^{-1} - \frac{p}{\text{tr } \Sigma} I$$

$$\begin{aligned}
 A\text{-var}(w) &= \frac{2}{n} \tau^2 \text{tr} \left\{ \left( \Sigma^{-1} - \frac{p}{\text{tr } \Sigma} I \right) \Sigma \right\}^2 \\
 &= \frac{2}{n} \tau^2 \left\{ \frac{p^2}{(\text{tr } \Sigma)^2} \text{tr } \Sigma^2 - p \right\}.
 \end{aligned}$$

4.  $r^2_{1(i), \dots, (i)}, i=2, \dots, p$  の漸近的同時分布

$x_1$  と  $(x_2, \dots, x_i)$  の間の重相関係数を  $r_{1(i), \dots, (i)}$  (標本),  $\rho_{1(i), \dots, (i)}$  (母集団), あるいはもっと簡単に,  $r_i, \rho_i$  と表わそう。  $r_i^2, \dots, r_p^2$  の漸近的同時分布を求めるのであるが, Anderson の本 [1] の定理 4.25 により, 平均が  $\rho_1^2, \dots, \rho_p^2$  の正規分布であることは明らかである。 以下は共分散行列を求めるものである。

定義により

$$1 - r_i^2 = \frac{|S_{(i)}|}{s_{11}|S_{(i)11}|}, \quad i=2, \dots, p \tag{4.1}$$

ただし  $S_{(i)11}$  は  $S_{(i)}$  における要素  $s_{11}$  の cofactor をつくる行列で, 従って  $S_{(i)}$  は  $i \times i$ ,  $S_{(i)11}$  は  $(i-1) \times (i-1)$  の行列である。最初に公式 I, II によって, いくつかの分散, 共分散を用意しておこう。

$$(1) \quad A\text{-cov}\{|\mathbf{S}_{(i)}|, |\mathbf{S}_{(j)}|\} = \frac{2}{n} |\Sigma_{(i)}| |\Sigma_{(j)}| \cdot \min(i, j) \quad (4.2)$$

これは、2つの行列の要素が全く一致しているか、あるいは、一方が他方の中に完全に含まれているときのものである。従って  $A\text{-var}(|\mathbf{S}_{(i)}|)$ ,  $A\text{-cov}(\mathbf{S}_{11}, |\mathbf{S}_{(i)}|)$ ,  $A\text{-cov}\{|\mathbf{S}_{(i)11}|, |\mathbf{S}_{(i)}|\}$  などは、この範ちゅうに入る。

$$(2) \quad A\text{-cov}\{\mathbf{S}_{11}, |\mathbf{S}_{(i)11}|\} = \frac{2}{n} \sigma_{11} |\Sigma_{(i)11}| \rho_i^2 \quad (4.3)$$

公式 II を用いて導いてみよう。

$$A\text{-cov}\{\mathbf{S}_{11}, |\mathbf{S}_{(i)11}|\} = \frac{2}{n} \sigma_{11} |\Sigma_{(i)11}| \text{tr}(\Phi \Sigma \Psi \Sigma).$$

$\sigma_1 = (\sigma_{12}, \dots, \sigma_{1i})$  とおけば

$$\begin{aligned} \Phi \Sigma &= \begin{matrix} 1 \\ p-1 \end{matrix} \begin{bmatrix} \frac{1}{\sigma_{11}} & 0 \\ 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{matrix} \Sigma \\ p-1 \end{matrix} = \begin{matrix} 1 & \frac{1}{\sigma_{11}} \sigma_1 & * \\ 0 & 0 & 0 \end{matrix} \begin{matrix} 1 \\ p-1 \end{matrix}, \\ \Psi \Sigma &= \begin{matrix} 1 \\ i-1 \\ p-i \end{matrix} \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & \Sigma_{(i)11}^{-1} & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{matrix} \Sigma \\ p-1 \end{matrix} = \begin{matrix} 0 & 0 & 0 \\ \Sigma_{(i)11}^{-1} \sigma_1' & I_{(i-1)} & * \\ 0 & 0 & 0 \end{matrix} \begin{matrix} 1 \\ i-1 \\ p-i \end{matrix} \\ \text{tr}(\Phi \Sigma \Psi \Sigma) &= \text{tr} \begin{bmatrix} 1 & \frac{1}{\sigma_{11}} \sigma_1 & * \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ \Sigma_{(i)11}^{-1} \sigma_1' & I_{(i-1)} & * \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \\ &= \frac{1}{\sigma_{11}} \sigma_1 \Sigma_{(i)11}^{-1} \sigma_1' \\ &= \rho_i^2 \end{aligned}$$

$$(3) \quad A\text{-cov}\{|\mathbf{S}_{(i)}|, |\mathbf{S}_{(j)11}|\} = \frac{2}{n} |\Sigma_{(i)}| |\Sigma_{(j)11}| \{i - \sigma_{11} \sigma_{(i)}^{11} (1 - \rho_j^2)\} \quad (4.4)$$

ただし  $i \leq j$ ,  $\sigma_{(i)}^{11}$  は  $\Sigma_{(i)}^{-1}$  の (1.1) 要素である。

この評価には、elementary な計算の方がまぎらわしくない。

$$\begin{aligned} A\text{-cov}\{|\mathbf{S}_{(i)}|, |\mathbf{S}_{(j)11}|\} &= \sum_{\alpha, \beta=1}^i \frac{\partial |\Sigma_{(i)}|}{\partial \sigma_{\alpha\beta}} \sum_{r, \delta=2}^j \frac{\partial |\Sigma_{(j)11}|}{\partial \sigma_{r\delta}} E(s_{\alpha\beta} - \sigma_{\alpha\beta})(s_{r\delta} - \sigma_{r\delta}) \\ &= \frac{2}{n} |\Sigma_{(i)}| |\Sigma_{(j)11}| \sum_{\alpha, \beta=1}^i \sum_{r, \delta=2}^j \sigma_{(i)}^{\alpha\beta} \sigma_{(j)11}^{r\delta} \sigma_{\alpha r} \sigma_{\beta\delta} \\ &= \frac{2}{n} |\Sigma_{(i)}| |\Sigma_{(j)11}| \left\{ \sigma_{(i)}^{11} \sum_{r, \delta=2}^j \sigma_{(j)11}^{r\delta} \sigma_{1r} \sigma_{1\delta} + \sum_{\alpha=2}^i \sum_{r, \delta=2}^j \sigma_{(i)}^{\alpha 1} \sigma_{(j)11}^{r\delta} \sigma_{\alpha r} \sigma_{1\delta} \right. \\ &\quad \left. + \sum_{\alpha=1}^i \sum_{\beta=2}^i \sum_{r, \delta=2}^j \sigma_{(i)}^{\alpha\beta} \sigma_{(j)11}^{r\delta} \sigma_{\alpha r} \sigma_{\beta\delta} \right\} \\ &= \frac{2}{n} |\Sigma_{(i)}| |\Sigma_{(j)11}| \{ \sigma_{11} \sigma_{(i)}^{11} \rho_j^2 + (1 - \sigma_{11} \sigma_{(i)}^{11}) + (i-1) \} \\ &= \frac{2}{n} |\Sigma_{(i)}| |\Sigma_{(j)11}| \{ i - \sigma_{11} \sigma_{(i)}^{11} (1 - \rho_j^2) \}. \end{aligned}$$

さて  $i^2$ ,  $j^2$  の共分散を求めよう。ただし  $i \leq j$  とする。

$$\begin{aligned}
 A-\text{cov}(\dot{r}_i^2, \dot{r}_j^2) &= A-\text{cov}(1-\dot{r}_i^2, 1-\dot{r}_j^2) = A-\text{cov}\left\{\frac{|\mathbf{S}_{(i)}|}{s_{11}|\mathbf{S}_{(i)11}|}, \frac{|\mathbf{S}_{(j)}|}{s_{11}|\mathbf{S}_{(j)11}|}\right\} \\
 &= (1-\dot{\rho}_i^2)(1-\dot{\rho}_j^2)E\left[\frac{\partial \log(1-\dot{\rho}_i^2)}{\partial |\Sigma_{(i)}|}(|\mathbf{S}_{(i)}| - |\Sigma_{(i)}|) + \frac{\partial \log(1-\dot{\rho}_i^2)}{\partial \sigma_{11}}(s_{11} - \sigma_{11})\right. \\
 &\quad + \frac{\partial \log(1-\dot{\rho}_i^2)}{\partial |\Sigma_{(i)11}|}(|\mathbf{S}_{(i)11}| - |\Sigma_{(i)11}|)] \times \left[\frac{\partial \log(1-\dot{\rho}_j^2)}{\partial |\Sigma_{(j)}|}(|\mathbf{S}_{(j)}| - |\Sigma_{(j)}|)\right. \\
 &\quad \left. + \frac{\partial \log(1-\dot{\rho}_j^2)}{\partial \sigma_{11}}(s_{11} - \sigma_{11}) + \frac{\partial \log(1-\dot{\rho}_j^2)}{\partial |\Sigma_{(j)11}|}(|\mathbf{S}_{(j)11}| - |\Sigma_{(j)11}|)\right] \\
 &= (1-\dot{\rho}_i^2)(1-\dot{\rho}_j^2)\left\{\frac{1}{|\Sigma_{(i)}||\Sigma_{(j)}|}A-\text{cov}(|\mathbf{S}_{(i)}|, |\mathbf{S}_{(j)}|) - \frac{1}{\sigma_{11}|\Sigma_{(i)}|}A-\text{cov}(s_{11}, |\mathbf{S}_{(i)}|)\right. \\
 &\quad - \frac{1}{|\Sigma_{(i)}||\Sigma_{(j)11}|}A-\text{cov}(|\mathbf{S}_{(i)}|, |\mathbf{S}_{(j)11}|) - \frac{1}{\sigma_{11}|\Sigma_{(j)}|}A-\text{cov}(s_{11}, |\mathbf{S}_{(j)}|) \\
 &\quad + \frac{1}{\sigma_{11}^2}A-\text{var}(s_{11}) + \frac{1}{\sigma_{11}|\Sigma_{(j)11}|}A-\text{cov}(s_{11}, |\mathbf{S}_{(j)11}|) \\
 &\quad - \frac{1}{|\Sigma_{(i)11}||\Sigma_{(j)}|}A-\text{cov}(|\mathbf{S}_{(i)11}|, |\mathbf{S}_{(j)}|) + \frac{1}{|\Sigma_{(i)11}|\sigma_{11}}A-\text{cov}(|\mathbf{S}_{(i)11}|, s_{11}) \\
 &\quad \left. + \frac{1}{|\Sigma_{(i)11}||\Sigma_{(j)11}|}A-\text{cov}(|\mathbf{S}_{(i)11}|, |\mathbf{S}_{(j)11}|)\right\} \\
 &= \frac{2}{n}(1-\dot{\rho}_i^2)(1-\dot{\rho}_j^2)\{i-1 - [i - \sigma_{11}\sigma_{(i)}^{11}(1-\dot{\rho}_j^2)] - 1 + 1 + \dot{\rho}_j^2 - (i-1) + \dot{\rho}_i^2 + (i-1)\} \\
 &= \frac{2}{n}(1-\dot{\rho}_i^2)(1-\dot{\rho}_j^2)\{\dot{\rho}_i^2 + \dot{\rho}_j^2 + \sigma_{11}\sigma_{(i)}^{11}(1-\dot{\rho}_j^2) - 1\} \\
 &= \frac{2}{n}(1-\dot{\rho}_i^2)(1-\dot{\rho}_j^2)\{\dot{\rho}_i^2 - (1-\dot{\rho}_j^2)(1-\sigma_{11}\sigma_{(i)}^{11})\}
 \end{aligned}$$

しかるに、 $\sigma_{11}\sigma_{(i)}^{11} = \frac{1}{1-\dot{\rho}_i^2}$  に注意すれば

$$\begin{aligned}
 A-\text{cov}(\dot{r}_i^2, \dot{r}_j^2) &= \frac{2}{n}(1-\dot{\rho}_i^2)(1-\dot{\rho}_j^2)\left\{\dot{\rho}_i^2 + (1-\dot{\rho}_j^2)\frac{\dot{\rho}_i^2}{1-\dot{\rho}_i^2}\right\} \\
 &= \frac{2}{n}\dot{\rho}_i^2(1-\dot{\rho}_i^2)(1-\dot{\rho}_j^2)\left(1 + \frac{1-\dot{\rho}_j^2}{1-\dot{\rho}_i^2}\right) \tag{4.5}
 \end{aligned}$$

or

$$= \frac{2}{n}\dot{\rho}_i^2(1-\dot{\rho}_j^2)(2-\dot{\rho}_i^2-\dot{\rho}_j^2) \tag{4.6}$$

特に  $i=j$  とすれば

$$A-\text{var}(\dot{r}_i^2) = \frac{4}{n}\dot{\rho}_i^2(1-\dot{\rho}_i^2)^2 \tag{4.7}$$

本節の結果をまとめておく。

【定理】 もし  $\dot{\rho}_i^2 \neq 0$ ,  $i=2, \dots, p$  であるならば,  $(\dot{r}_2^2, \dots, \dot{r}_p^2)$  は漸近的に, 平均  $(\dot{\rho}_2^2, \dots, \dot{\rho}_p^2)$  をもち, (4.5) or (4.6), (4.7) で与えられる分散, 共分散をもつ,  $(p-1)$  変数正規分布に従う。

5.  $\dot{r}_{1i.2}, \dots, \dot{r}_{i-1} \equiv \bar{r}_{1i}^2$ ,  $i=2, \dots, p$ , の漸近的同時分布

$x_1$  と  $x_i$  の,  $(x_2, \dots, x_{i-1})$  の影響を除いたあとの偏相関係数を  $r_{1i.2}, \dots, r_{i-1}$  (標本),  $\rho_{1i.2}, \dots, \rho_{i-1}$  (母集団), あるいは, もっと簡単に,  $\bar{r}_{1i}$ ,  $\bar{\rho}_{1i}$  と表わす。

$(\bar{r}_{1i}^2, \dots, \bar{r}_{1p}^2)$  の漸近的分布は, 前節の場合と同じく, 平均  $(\bar{\rho}_{1i}^2, \dots, \bar{\rho}_{1p}^2)$  をもつ正規分布

となることは容易にわかることである。分散，共分散を求めるには，次の重相関係数と偏相関係数を結ぶ関係式（例えば [2], 307 頁）を利用すると，前節の結果を使うことができて便利である。

$$1 - \dot{r}_i^2 = (1 - \bar{r}_{1i}^2)(1 - \bar{r}_{1i^2}^2) \cdots (1 - \bar{r}_{1i^i}^2) \quad (5.1)$$

$$1 - \dot{\rho}_i^2 = (1 - \bar{\rho}_{1i}^2)(1 - \bar{\rho}_{1i^2}^2) \cdots (1 - \bar{\rho}_{1i^i}^2) \quad (5.2)$$

故に

$$1 - \bar{\rho}_{1i}^2 = \frac{1 - \dot{\rho}_i^2}{1 - \dot{\rho}_{i-1}^2}, \quad 1 - \bar{r}_{1i}^2 = \frac{1 - \dot{r}_i^2}{1 - \dot{r}_{i-1}^2} \quad (5.3)$$

を得る。これより  $\text{cov}(\bar{r}_{1i}^2, \bar{r}_{1j}^2)$  は次のように計算される。ただし  $i < j$  とする。

$$\begin{aligned} A - \text{cov}(\bar{r}_{1i}^2, \bar{r}_{1j}^2) &= A - \text{cov}(1 - \bar{r}_{1i}^2, 1 - \bar{r}_{1j}^2) \\ &= A - \text{cov}\left(\frac{1 - \dot{r}_i^2}{1 - \dot{r}_{i-1}^2}, \frac{1 - \dot{r}_j^2}{1 - \dot{r}_{j-1}^2}\right) \\ &= (1 - \bar{\rho}_{1i}^2)(1 - \bar{\rho}_{1j}^2) E \left[ \frac{1}{1 - \dot{\rho}_{i-1}^2} (\dot{r}_{i-1}^2 - \dot{\rho}_{i-1}^2) - \frac{1}{1 - \bar{\rho}_{i^2}^2} (\dot{r}_i^2 - \dot{\rho}_i^2) \right] \\ &\quad \times \left[ \frac{1}{1 - \dot{\rho}_{j-1}^2} (\dot{r}_{j-1}^2 - \dot{\rho}_{j-1}^2) - \frac{1}{1 - \dot{\rho}_j^2} (\dot{r}_j^2 - \dot{\rho}_j^2) \right] \\ &= (1 - \bar{\rho}_{1i}^2)(1 - \bar{\rho}_{1j}^2) \left\{ \frac{1}{(1 - \dot{\rho}_{i-1}^2)(1 - \dot{\rho}_{j-1}^2)} A - \text{cov}(\dot{r}_{i-1}^2, \dot{r}_{j-1}^2) \right. \\ &\quad - \frac{1}{(1 - \dot{\rho}_{i-1}^2)(1 - \dot{\rho}_j^2)} A - \text{cov}(\dot{r}_{i-1}^2, \dot{r}_j^2) - \frac{1}{(1 - \dot{\rho}_i^2)(1 - \dot{\rho}_{j-1}^2)} A - \text{cov}(\dot{r}_i^2, \dot{r}_{j-1}^2) \\ &\quad \left. + \frac{1}{(1 - \dot{\rho}_i^2)(1 - \dot{\rho}_j^2)} A - \text{cov}(\dot{r}_i^2, \dot{r}_j^2) \right\}. \end{aligned}$$

前節の (4.5) を代入すれば，

$$\begin{aligned} A - \text{cov}(\bar{r}_{1i}^2, \bar{r}_{1j}^2) &= \frac{2}{n} (1 - \bar{\rho}_{1i}^2)(1 - \bar{\rho}_{1j}^2) \left\{ \dot{\rho}_{i-1}^2 \left( 1 + \frac{1 - \dot{\rho}_{j-1}^2}{1 - \dot{\rho}_{i-1}^2} \right) - \dot{\rho}_{i-1}^2 \left( 1 + \frac{1 - \dot{\rho}_j^2}{1 - \dot{\rho}_{i-1}^2} \right) \right. \\ &\quad \left. - \dot{\rho}_i^2 \left( 1 + \frac{1 - \dot{\rho}_{j-1}^2}{1 - \dot{\rho}_i^2} \right) + \dot{\rho}_i^2 \left( 1 + \frac{1 - \dot{\rho}_j^2}{1 - \dot{\rho}_i^2} \right) \right\} \\ &= -\frac{2}{n} (1 - \bar{\rho}_{1i}^2)(1 - \bar{\rho}_{1j}^2) \frac{(\dot{\rho}_i^2 - \dot{\rho}_{i-1}^2)(\dot{\rho}_j^2 - \dot{\rho}_{j-1}^2)}{(1 - \dot{\rho}_i^2)(1 - \dot{\rho}_{i-1}^2)} \quad (5.5) \end{aligned}$$

(5.2) より，

$$\dot{\rho}_i^2 - \dot{\rho}_{i-1}^2 = \prod_{\alpha=1}^{i-1} (1 - \bar{\rho}_{1\alpha}^2) \cdot \bar{\rho}_{1i}^2, \quad \dot{\rho}_j^2 - \dot{\rho}_{j-1}^2 = \prod_{\alpha=1}^{j-1} (1 - \bar{\rho}_{1\alpha}^2) \bar{\rho}_{1j}^2.$$

したがって (5.5) に代入すれば，最終結果として

$$\begin{aligned} A - \text{cov}(\bar{r}_{1i}^2, \bar{r}_{1j}^2) &= -\frac{2}{n} (1 - \bar{\rho}_{1i}^2)(1 - \bar{\rho}_{1j}^2) \frac{\bar{\rho}_{1i}^2 \bar{\rho}_{1j}^2 \prod_{\alpha=1}^{i-1} (1 - \bar{\rho}_{1\alpha}^2) \prod_{\alpha=1}^{j-1} (1 - \bar{\rho}_{1\alpha}^2)}{\prod_{\alpha=1}^i (1 - \bar{\rho}_{1\alpha}^2) \prod_{\alpha=1}^{i-1} (1 - \bar{\rho}_{1\alpha}^2)} \\ &= -\frac{2}{n} \bar{\rho}_{1i}^2 \bar{\rho}_{1j}^2 \prod_{\alpha=1}^j (1 - \bar{\rho}_{1\alpha}^2) \quad (5.6) \end{aligned}$$

を得る。

分散の計算は簡単である。

$$\begin{aligned} A - \text{var}(\bar{r}_{1i}^2) &= (1 - \bar{\rho}_{1i}^2)^2 \left\{ \frac{1}{(1 - \dot{\rho}_{i-1}^2)^2} A - \text{var}(\dot{r}_{i-1}^2) - \frac{2}{(1 - \dot{\rho}_{i-1}^2)(1 - \dot{\rho}_i^2)} A - \text{cov}(\dot{r}_{i-1}^2, \dot{r}_i^2) \right. \\ &\quad \left. + \frac{1}{(1 - \dot{\rho}_i^2)^2} A - \text{var}(\dot{r}_i^2) \right\} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{4}{n} (1 - \bar{\rho}_{1i^2})^2 \left\{ \dot{\rho}_{i-1^2} - \dot{\rho}_{i-1^2} \left( 1 + \frac{1 - \dot{\rho}_{i^2}}{1 - \dot{\rho}_{i-1^2}} \right) + \dot{\rho}_{i^2} \right\} \\
&= \frac{4}{n} (1 - \bar{\rho}_{1i^2})^2 \frac{\dot{\rho}_{i^2} - \dot{\rho}_{i-1^2}}{1 - \dot{\rho}_{i-1^2}} \tag{5.7}
\end{aligned}$$

$\frac{\dot{\rho}_{i^2} - \dot{\rho}_{i-1^2}}{1 - \dot{\rho}_{i-1^2}} = \bar{\rho}_{1i^2}$  であるから, 予想通りの結果

$$A - \text{var}(\bar{r}_{1i^2}) = \frac{4}{n} \bar{\rho}_{1i^2} (1 - \bar{\rho}_{1i^2})^2 \tag{5.8}$$

を得る. 本節の結果をまとめておく.

[定理]  $\bar{\rho}_{1i^2} \neq 0, i=2, \dots, p$  ならば,  $(\bar{r}_{12^2}, \dots, \bar{r}_{1p^2})$  は,  $n$  が充分大きいとき, 漸近的に, 平均  $(\bar{\rho}_{12^2}, \dots, \bar{\rho}_{1p^2})$ , (5.8), (5.6) で与えられる分散・共分散をもつ,  $(p-1)$  変数正規分布に従う.

統計数理研究所

#### 参 考 文 献

- [1] T. W. Anderson: *An Introduction to Multivariate Statistical Analysis*. John Wiley & Sons, New York, 1958.
- [2] H. Cramér: *Mathematical Methods of Statistics*. Princeton University Press, 1946.
- [3] I. Olkin and M. Siotani: "Asymptotic distribution of functions of a correlation matrix," *Technical Report* No. 6, 1964, Stanford University.
- [4] S. N. Roy and R. E. Bargmann: "Tests of multiple independence and the associated confidence bounds," *Ann. Math. Statist.*, Vol. 29, (1958), pp. 491-503.